

『水』に関わる町名の由来について【大垣市編】

おおがきし 安八町 わのうちちょう

- 当管内の**大垣市**、**安八町**、**輪之内町**は、西南濃地方に属し、昔から、美味しく綺麗な水が自然に地下から湧き出し、水と共に発展してきた地域です。しかし、その一方で地形的特徴から、「洪水常襲地域」とも言われ、常に洪水に見舞われ、水に苦しめられてきた地域もあります。度々、洪水に襲われていた先祖の人々は、今から約400年前、洪水から生命と財産を守るために、周りの人々と共に、自分たちの家の周りに「輪中」と呼ばれる堤防を築きました。こうした歴史的背景を下に、今回、水に関わる町名のいわれを、書籍「水都大垣の地名」（大垣市地名研究会編著）や「西美濃おもしろ地名考」（中日新聞大垣支局）、また、有識者からの聞き取りを参考として、その幾つかを紹介します。

【大垣市の地名由来】

- 大垣市史によれば、中世、洪水から家屋や集落を守るために、**大きな垣（堤）**を築いたことから、「**大垣**」と名付けられたと記述があります。耳で聞いた「オオガキ」を筆で書くとき、「**大柿**」と当て字にし、ここから、大柿の地名伝説も生まれました。



『大垣と大柿』



写真： 大垣市万石（H3 河合孝氏撮影）

江戸時代（1600年頃）の輪中とお団堤



※御団堤とは、徳川家康が慶長14年（1609）犬山より弥富までの50Km区間に渡って築造した長大な堤防。当初は、名古屋城防衛という軍事上の目的として設置されたが、その後は、尾張国の水防に効果を発揮した堤防。



1896年（明治29）の大水 大垣城付近の浸水状況
(写真：大垣市立図書館提供)

○ 輪中の成り立ちや輪中集落の立地条件からついた町名

- 大垣輪中が出来上がったのは1653年と言われていますが、輪中堤防を築き始めた頃は、川の流れの直撃を防ぐように、上流に面した所に、U字形又はV字形に築かれただけでした。この様に下流部に堤がないところを、「尻無堤」「築捨堤」と言われ、その場所が築捨町です。

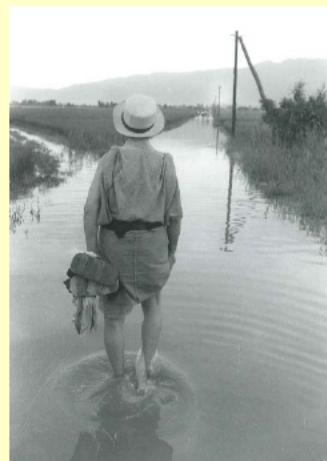
出典：輪中について（輪中館資料より）



- 大垣は伊勢湾より約40~50Kmの内陸部にありながら、平均標高約5mで破堤入水による河川からの外水氾濫だけでなく、排水不良による内水氾濫によって大きな浸水被害を被ってきた地域です。そのため、古くからの集落は微高地に立地して出水に対応してきました。大垣市内には、島町・大島町・島里町・多芸島町・八島町・竹島町など、「島」が付く地名が多くありますが、これらは微高地を表す地名と考えられ、輪中地帯で最も早く住居として使用されていたと言われています。

出典：輪中について（輪中館資料より）

- 相川は暴れ川で名高く、洪水のたびに、どんどん上流から土砂を運び、洲と洲の間の洲間を埋めて大地を作りました。いつの間にか、「すま」がなまって「しま」になり、島を当て字にしたのが島町です。



- 昔、揖斐川の本流であった杭瀬川と平野井川の二本の川に挟まれて浮かぶ大島郷から名付けられたのが大島町です。

- 杭瀬川の大川が、洪水にたびに土砂を運び、川の中に洲ができ中島となりました。その中島も、やがて洲間が埋まって低湿地となり、そこを開拓して住居がたち、中島の里ができたところが島里です。

- 昔、きつい崖のことを「タギ」とか「タキ」と言い、崖が多いタギ山（今の養老山）からタギ郡の地名が生まれました。多芸（タギ）島はタギの村という意味で、多芸は当て字とのことです。

- 八島とは多くの島という意味。幾つかの島があるように見える湿地帯であった所が八島町です。また、竹藪が多くあったところが、竹島町です。

下駄を手に浸水の道をゆく老人
出典：写真集「輪中より」
大垣市島町（S34 河合孝氏撮影）

○ 洪水の常襲地域からついた町名

- 荒川とは、川水の流れが速く、波立つ荒れる川のことです。平安期の中頃、大谷川の遊水地帯を荒崎郷いました。大谷川がよく氾濫したため、人々が荒川のようだと言ったことが荒川町の由来です。
- かつて静里輪中は水の遊び場（遊水池）として、大垣城下を浸水させないため、洪水時に上手側の堤防を切り割り、故意に水を流し込んだ処です。上手の村と下手の村は美濃路の上の土壠の高さで激しく抗争し、悪水を引き受けた静里輪中の村人は悩み苦しんだそうです。「静かな村でありたい」という切なる村人の願いが静里町の由来です。

- 大垣市には、**曾根町**、**中曾根町**、**貝曾根町**、**横曾根**など、曾根地名が幾つもあります。「ソネ（曾根）」とは、洪水の後に盛り上がって出来た自然堤防を意味します。大昔、長い高まりを「ネ」と言い、オネ（尾根）、ミネ（峰）、ウネ（畦）、スネ（脛）、トネ（刀根）と形も言葉もよく似ています。「貝曾根町」は、貝が盛り上がったような形状の自然堤防ができたこと、また、「横曾根」は、堤防が横たわって揖斐川に合流する形状が由来しています。
- 洪水で辺り一面が水につくと、笠をふせたように盛り上がり、ぽっかり浮かんでいたところが笠村となりました。笠之郷の上手を**上笠**、下手を**下笠**となりました。
- 戦国時代、杭瀬川などの洪水が襲った際、水の通しやすい地盤の所で、お釜の大きな穴（ガマ）がぼこぼこと増えて発生した場所が**釜笛（増）**の由来です。※洪水時に堤防から離れた場所で、水と土砂が吹き出し、クレーター状のもの（噴砂痕）が見られる場所を「ガマ」と言います



ガマの発生状況写真
(2012年 矢部川)

○ 川の名からついた町名

- もともと揖斐川の本流は杭瀬川を流れていましたが、1530年の大洪水で揖斐川の流れが現在の位置に変化しました。その広い川跡の荒れ地を開発したところが**久瀬川町**の位置に当たります。昔は、クイセ川と呼ばれていましたが、いつしか「イ」が落ちて、「クゼ川」となり、漢字は後からの当て字です。また、揖斐川本流が、杭瀬川から現在地に変わった際、辺り一面、波を被った状態となり、波でできた洲（須）のところが**波須**です。
- 青柳町**は、杭瀬川の流れに沿って堤防沿いに堤防を補強する目的で植えられた柳の木からきています。青々とした青柳、特に春の芽が吹く頃の青柳が地名の由来とされています。
- 杭瀬川と牧田川が合流し、東へ方向を変える場所でした。川幅が狭く、水深が深かったことから、高い渦のところと言う事で**高渦**です。



川並町付近の空撮（昭和34年撮影）

- 1530年の大洪水で、揖斐川本流が、杭瀬川から現在地に変わった際、突然大きな川になりました。その時、川が真っ直ぐで、水の流れが速いところを**直ヶ江**（直江町）、川の中に小高い大きな島がぽっかり浮かび、その島の姿が馬の瀬のような形をしていたところを**馬瀬町**と呼ぶようになったようです。また、水量が増え、以前にも増して自噴水がよく噴くようになったところを、今噴く（今福町）と言うようになりました。なお、皆、幸福になりたいとの想いから、漢字は後からの当て字とのことです。**平町**は、大川の土砂が積もった平らなところが由来です。
- 揖斐川の堤防沿いに、村の幅約1～2Km、延長約9Kmのすらりと並んだ八か村（小泉、直江、平、古宮、米野、深池、今福、難波野）を明治時代に**川並村**としました。

- もとは揖斐川の大洪水で堤防が切れたところを切戸村と呼んでいましたが、名前が縁起悪いという事で、米が万石とれるという縁起が良い名前に変更したところが万石です。

- 土地が丸く凹んでいて、ツブラみたいなところが津村町です。

- 今しがたの大洪水で、大地が削られ、流された低地に、人々が次々と家を建てだしたところからが今町です。また、同じように、今しがたの大洪水で小高い岡が出来てしまったところが今岡町です。

- 江戸の頃、水門川が揖斐川へ流れ込む川の口（合流点）があったところが川口です。その後、水門川を改修して南流させ、輪之内町・塩喰地先で牧田川へ注ぐようにしました。尚、揖斐川の洪水による大垣城下への逆流を防ぐため、1653（承応2年）、大垣市今福地内に「川口村水門」と呼ばれる閘門を築造しました。



万石に隣接する三本木地区に設置されている龍神社は、五穀豊穫を願い建立。



明治のはじめ頃の川口村水門（岐阜県歴史史料館）

○ 自噴水からついた町名

- 湧水が自然に湧く場所を「ガマ」と言い、その由来で河間町になりました。なお、「河間」と言う字は、地下水の流れと言う意味で当て字とのことです。
- 豊かな自噴水（井戸）が、いつまでも長く湧き続けるようにと願い、名付けられたのが長井町です。
- 自噴水が「カガカガ」と湧く音が聞こえてくることから名付けられたのが加賀野です。



○ 舟運等の河川利用から付いた町名

- 大垣市の経済を昭和初期まで支えたのが船町です。美濃国は海に面していませんが、木曽三川を利用した舟運技術が発達していたうえに、大垣は城下町であり、東海道と中山道を結ぶ美濃路が経由し、近くには中山道赤坂宿もあり経済活動が盛んでした。また、この地は北陸や近江方面へと街道が伸び、南は水路で桑名や名古屋と繋がっており、物貿の中継地点としての役割を担うなど、地理的な条件も揃っていました。

- 水門川舟運において、船から多くの荷物や人を下していたところが船町です。
- 桑名から杭瀬川や相川などへ上り下りの船で、賑わう大きな渡場（トバ）があり、船着き場であったところが大外羽です。



大垣市船町 「住吉灯台」（県指定文化財）



【出張所コメント】

- 現在、大垣市の町名は220あり、町名はその土地の名前です。昔から豊かな自然と優れた文化の中で人々の生活が営まれる過程の中で町名が生まれ、今に語り継がれています。今回、紹介した由来については、必ずしも一説でない場合もありますが、こうした歴史の背景に触れ、地域の町名のいわれを知ることは、その時代を彷彿させるロマンを感じられ、未来へのより豊かな道標となるものと考えています。